『春秋経伝集解』
― 日本のインキュナビュラ（揺籃期本）―

神鷹　徳治*

本書は，江戸時代の初期，慶長年刊（1596-1615）に，古活字によって印刷された，大本全15冊からなる漢籍である。それでは，なぜ，日本で，中国の古典である通称“春秋左氏伝 ”（或いは“左伝 ”）が，この時期に，しかも古活字によって出版されたのであろうか。この疑問に答える前に，日中における印刷術の歴史について若干触れることにする。

中国では，後漢の蔡倫（?-121の頃）によって，紙が本格的に実用化されると，経済性，便宜性が歓迎され，それまでの，木簡，竹簡あるいは絹布にかわる書材として，急速に普及していった。従って，長期に亘り図書は写本として流布してゆき，印刷術が発生したのは，唐の前期（AD658？-）の頃と現在では推定されている。[1]但だ，この印刷技術が本格的に図書に及ぶのは、五代・北宋を経て南宋に入ってからのことである。とりわけ，南宋に至ってからは，一段と発展したといわれている。そしてこの技術が我が国にもたらされ，鎌倉末期から室町期の頃には，五山の禅僧によって，仏典が出版されている。又五山の僧は仏典のみならず，自己の教養の為に，仏典以外の他の漢籍，即ち，杜甫・韓愈といった唐代文人の文学作品にも深い理解を求め，宋・元への留学僧が帰国する際，将来してきた。それらの宋・元版を日本で，復刻乃至翻刻したのである。仏典を含むこれらの漢籍が所謂五山版と呼ばれているものである。但だ，この時期の出版活動の多くの場合は，その出版工房が大寺院であったので，仏書がその大半を占めており，日本の古典や外典（仏書以外の中国の典籍）は少なかった。や

*かみたか・とくじ／文学部／中国文学
[1]神田喜一郎「中国における印刷物の起源について」（全集　）

や例外的に，地方都市堺で，古辞書や医書，論語等が出版されているが，これは当時の商業大都市堺の経済力がその背景にあったといわれている。

その後，信長・秀吉により，さしもの長期に亘る戦国の騒乱も収まり，家康の江戸幕府の成立とあいまって，漸く国内にも政治的安定がもたらされようとしたその時，突然，古活字版による印刷図書が，当時の出版界に出現するのである。

活版印刷の二代潮流

江戸幕府が成立する直前の安土桃山時代に，わが国において，東西の印刷術が遭逢する一時期が存在している。グーテンベルグによる実用化に成功した活版印刷の技術が，かの遣欧少年使節の渡欧からの帰国の際，その印刷機械と活字が，わが国にもたらされ，出版された“キリシタン版 ”がそれである。一方，東洋のそれは，秀吉の朝鮮侵略の際に略奪してきた大量の朝鮮活字本と，その折ともに連れ来られた印刷技術及びその技術者が関与している。

“キリシタン版 ”の方は，キリスト教の禁圧とともに，数十部の発行以外はまったく絶版の状態になってしまうのに対し，朝鮮渡来の活字印刷の方は，わが国では，慶長年間をピークとする勅版，要法寺版及び嵯峨本の雅称で知られる古活字版の出現を迎える。本学所蔵のこの『春秋経伝集解』もその時期に刊行された本格的漢籍である。

中国・朝鮮における活字本

世界史の潮流で云うならば，活字印刷は，ドイツのグーテン・ベルグ（15 世紀後半）[2]の発明によることは，誰一人として知らぬ人はいないが，こと，活字印刷ということに限定するならば，中国の，或いは朝鮮の活字印刷の歴史とその展開は，グーテンベルグのそれを上まわるものを持っているのである。惜しむらくは，実物資料としては確認できないが，文献によれば，少なくともこれに関与した二人の人物が浮かび上がってくる。畢

[2]高宮利行『グーテンベルグの謎』（岩波書店　1998 12）

昇（？－1048）と，その二百年後の，王楨という二人の中国人である。ただ，この二人の創意・工夫にもかかわらず，実用化には多くの難点が存在し，その後も細々とは続いたものの，中国ではついに図書の主流になることはなかったようである。しかし，このあたらしい技術は，隣国の高麗王朝に受け継がれ，その後の李氏王朝になって，飛躍的に成長し，朝鮮活字本の名声[3]を今に伝えているわけである。そして，朝鮮活字本の出版全盛期に遭遇したのが秀吉の文禄・慶長の役であった。この秀吉の侵略軍は，大量の朝鮮活字本の存在に羨望の思いを深め，その書籍とともに，その技術をも日本に強引に持ってきたのである。これによって，日本は文禄・寛永の間に，日本印刷史上の一大エポックといわれる古活字本印刷の時代を迎えることになる。

古活字版の価値について

わが国の版本の刊行は，周知の如く，現存最古の印刷物と称せられる百万塔陀羅尼（奈良，8世紀）から始まり，その後はしばらく休止し，平安後期より鎌倉・足利の両幕府を経て，その間連綿と続き，安土桃山時代を最初の頂点とし，江戸期に入り，その全盛期を迎える。しかし，幕末から明治初期にかけて欧米の活版技術（グーテンベルグの系統）が導入されると，伝統的木版・活字印刷はほとんど消滅していくことになるが，ともかくも，日本は欧米とはまた独自のかつ長期に亘る印刷史を持っているのである。

そのうち，安土桃山時代から徳川初期にかけての即ち，1590年-1650年のほぼ50年間が，先に紹介した古活字版の時代に相当する。グーテンベルグによって実用化された西欧の活版印刷術が，その普及とともにヨーロッパの二大変革，即ち，ルネッサンスと宗教改革というヨーロッパ近代社会を形成した社会変革の大きな動因になったことは良く知られている。

日本でも，当然のことながら歴史的意義としては，差異はあるものの，高度の社会的役割を果たしている。従来，ややもすれば公卿・博士家と

[3]朝鮮活字版1377年刊行『白雲和尚抄録仏祖直指心要節』巻下は現存世界最古の活字印本『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店，1999）p. 392. 〈朝鮮活字本〉藤本幸夫氏執筆

いった一部の貴族の堂宇に閉鎖されていた学芸世界が，この時期の古活字版の出版によって解放されたのである。

このように，江戸時代は，全体として，図書の形態は木版本（整版本とも云う）中心となっていたが，木版本の普及を準備した事業としてその初期の古活字版の出版は高く評価されている。それでは，古活字版の現時点での具体的特色はどこに求められているのであろうか。その特色を列挙するならば次の5点になるであろうか。

（一）古い印刷書籍として

（二）日本最初の活字版として

（三）書籍として堂々としている

（四）日本古典の本格的テキストとして

（五）当時においても無論，今日においても容易には入手しにくい書籍として

（一），（二），（三）を古版本としての評価とするならば，（四），（五）は学問的評価と云えよう。

日本の古典としての中国の漢籍

現在では，国文学の古典と云えば，『源氏物語』や『徒然草』に代表される仮名を主体とする作品群を指している。しかし，このことは，江戸後期の国学者，本居宣長等によって提唱された，国学運動によるその結果なのであり，元来は，日本の古典には中国の古典，即ち漢籍も含まれていた。従って，本学図書館所蔵の『春秋経伝集解』も，同時期にこれまた，古活字によって刊行された，『源氏物語』，『枕草子』，『徒然草』等の日本の代表的古典作品と同様のわが国の古典の内実を占める作品であり，わが国の文化史上に高い価値を持っている書籍である。

繰り返すことになるが，従来，ややもすれば，一部の公卿・博士家に秘蔵されていた，これら日中の古典籍類が，文禄－寛永間に，古活字本の底

本となり，一挙に公開されることになったのは，日本文化史上においても，注目されるべき事業ではあるまいか。まさしくこれらの古活字本こそは，後の寛永以降の整版本にその形態が移転するまでに，江戸全期に亘る学芸文化の盛行を育んだ学術上の推進母体となったのである。

本書のテキストとしての評価

さて，以下少しく，漢籍のテキストとしての『春秋経伝集解』本の学問的意義にふれてみたい。宋代に出版された宋版本が，中国における最初版本であったので，当然，テキストとしても信頼度が高く，今日と難も，種々の校定本の底本となっている。しかし，宋版は，本土においても既に稀覯書であり，日本においては尚更入手しがたい書籍であった。このような入手の悪条件の時期代に，やっとの思いで博士家等に購入された宋版本やそれ以前に将来されていた古写本が，古活字本の底本となったことにより，上質のテキストが普及していったことが推測される。とすれば，善本としての古活字本のテキストとしての評価はこの一件によっても極めて高くなるのではなかろうか。以上の私見が，決して臆説ではないことを示す為に，これに関する一例を取り上げ，少しく論じてみることにする。

『七経孟子攷文』について

江戸中期，荻生徂徠の弟子で，山井鼎（1609-1726）という学者が，師徂徠の勧めで、当時、足利学校に残存していた，漢籍の古写本や刊本を整理して，江戸期漢学の分野における校勘学の屈指の名著とされる『七経孟子攷文』を撰述している。後，幕府は，これを荻生北渓（徂徠の弟）に命じて，その補遺を作らしめ刊行させた。

ほどなく，この書物は中国に輸出され，当時の政界・学術界の大物であった阮元の目にとまり，彼はその精審さに驚嘆し，自らも翻刻し，その結果四庫全書にも納められている。阮元が，現在でも経学研究の標準テキストとなっている〈十三経注疏〉を翻刻し諸本の異文を列挙している『十三経注疏校勘記』を刊行した機縁となった本と言われている。後者の『三経注

疏校勘記』の〈左伝注疏〉の「引據各本目録」に「足利本春秋経伝集解」として引用されているものが古活字本の本文である。その双行注に「左伝考文称足利本者宋板経伝集解也・今以活字板験之是為其原本也」という山井の案語が引用されていることから伺われるように，宋本と活字本との近似性を山井は指摘している。この度，筆者も若干ではあるが，校勘記引用の宋本諸本と明大本活字本を比較してみたところ，例外なく一致する事実を確認できた。一方，中国の宋版は，現存本が少なく，しかも，その大半は不完全である。これに対しこの三十巻揃いの古活字本は，日本での翻刻とは云え，宋版の本文をかなりの程度正確に留めている可能性が強い。してみれば，或いは本書によって，現在見ることの出来ない宋版の本文を復元できるのではないか？この点から考察しても，極めて貴重なテキストであると云わざるを得ない。

古活字本諸本の所在については，つとに，故川瀬一馬博士『古活字本の研究』に，詳述されている。そのうち，国書の分野については，とりわけ戦後に至りその本文についての微に入り細に亘る研究が報告されているが，なにゆえか，漢籍の分野に至っては，現在に至るも未だしという状態である。書籍にとっては，いかほど善本であっても，死蔵ということは最も悲しむべきことである。篤学の士のこの門を敲かれんことを切に望むものである。

『七経孟子考文』（阮元刊本）

補注（一）インキュナビラ

1500年以前のヨーロッパにおける活字本揺籃期時代の刊本

補注（二）慶長年刊前後に刊行された活字本を特に古活字本と述べているのは，幕末，明治初期の間，木活字を利用した図書が刊行されている。故の時の活字本即ち,新活字本と区別する為の呼称である。

新活字本については

『近世活字版目録』多治比郁夫，中野三敏共編，(日本書誌学大系50, 1990.10)『近世活字版図録』後藤憲二編（日本書誌学体系51 青裳堂書店 1990.6）